

# ピーマン



## 育苗

床土(培土) → ●**畑の大将〈青〉3%**ほどを培土に混和。または1鉢当り20gを置き肥すると、ガッシリ充実した苗ができる。(地床の場合は本畑同様に)

散水時に散布 (葉面散布・灌水) → ●**根っ酵素500倍液** → 根を強く動かし、生長を促進。  
 ●**花咲くCa液500倍** → 茎葉を厚く充実させ、健全な体質を作る。  
 ※播種後、接木まで 毎日～3日間隔、1000倍の交互散布で茎が太くなる。  
 ※接木4日後から最初だけ1000倍、以後500倍で7日間隔・交互に、葉上からタツプリ散布。(ただし状態により適宜選択)  
 ※移植(仮植)時には根っ酵素を灌水して根を伸ばす。  
 ※定植5日前に、苗の引締め・仕上げに、Ca液状を散布。  
 7～11節の第1分枝の基部に着く最初の花の開花前に定植。老化させない事。

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
本畑の地力作り	なるべく早い時期に投入し、なるべく深く耕耘する (定植までに20日以上の間隔をおく)	● <b>ラクトバチルス600g</b> →通気・保水・保肥性がよく、深層まで肥沃な土に。 ● <b>堆厩肥2トン～4トン</b> (なるべく多く) ※前作の茎葉もなるべくスキ込み。 ● <b>硫安80kg</b> (N成分:16kg・半促成100kg、促成120kg) ※微生物によって地力化し、定植時には土壤EC:0.2以下と抑えられる。 ※カリ成分12kg程度は吸収するが、むしろ堆厩肥によるカリ過剰に注意。 ※チッソ多肥になるので土壤の酸性化に注意。もし土壤pHが極端に酸性(pH:5.5以下)なら、地力作りにも畑の大将〈青〉60kg以上を投入(栽培中は40kg程度)なお下記整地時にも施す。
本畑の整地時	整地・ウネ作り時に散布 (全面散布、及びウネ上への散布)	● <b>畑の大将〈青〉80kg</b> (半促成100kg、促成120kg) ※ハウス等で、土壤が特に高pH・高ECの場合のみ田畑の大将〈赤〉を。 ※カルシウム量はチッソ量と同等以上に、多めの施用を推奨。 ● <b>マンゾク粒状60kg</b> →根張り・生長促進、土壤病害・疫病の予防。 ※もし特に心配な園で農薬の土壤消毒をした場合は、毒性が抜けた後に米ヌカ等に混ぜて、ラクトバチルスを補う。(同時施用可能)

(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
定植時	苗のドブ漬け・植付け後 灌水	<p>●根っ酵素500倍液 →活着・初期の根張り促進。                      ※定植直後の根の伸びがピーマンの順調な生育を決定する。                      《必須》</p>
定植後2～30日 (収穫開始の前)	〈根と体質作り〉 初期の灌水と葉面散布	<p>①根っ酵素1ℓを灌水(200倍以上、適宜)または葉面散布。                      ※定植後15日前後にタツプリ深く灌水し、四方に深く根を伸ばす。                      ②花咲くCa液を葉面散布または1ℓ 灌水(200倍以上、適宜)                      ※①の5日ほど後にカルシウムを与える。                      ※土壌EC:0.2程度で根をしっかり伸ばす。初期に決して多肥にしない事。</p>
収穫中の灌水 (推奨)	灌水施用(半月ごと繰返し)	<p>①根っ酵素1ℓを灌水、または葉面散布 →根の強化。                      ※とくに収穫量が多い時には、酵素液で草勢を維持し、波をつくらないように。枝根が多く土の粒子を抱え込むような根を維持することが重要。                      ②アミノ酸液(または自家製アミノ酸液肥) 10ℓを灌水                      →栄養補給。                      ③花咲くCa液1ℓを灌水、または葉面散布。                      →引締め・生殖生長。</p>
追肥	収穫開始1ヵ月後から、上記の灌水では不足する場合のみ、追肥する。(1～2ヵ月ごとに)	<p>●硫安20kg(状態によって調節)                      ●畑の大将&lt;青&gt; 20kg                      →硫安と同時施用して 栄養バランス維持、疫病対策も。                      ※とくに過繁茂や、花が悪い時、果形がイビツな時、尻腐れ果が出る時には、すぐにカルシウムを効かせてバランスを回復する。                      ※栽培中に土壌pH:6.2前後を保つこと。酸性になった時は、カルシウムを。                      ※土壌ECは通常時0.2で根が伸び、施肥後3日ほど0.4までが適当。EC:0.5以上になると根の働きが著しく衰弱する。</p>
葉面散布	草勢調節 葉面散布(7日ごと交互に)	<p>●花咲くCa液500倍                      →花と果実を強くする。灰色カビ・斑点細菌病も減る。                      ●根っ酵素500倍液                      →根・導管の強化、草勢維持、肥大促進、茎葉生長。                      ※灌水施用及び追肥より速効的な微調整。農薬には酵素混用を。</p>

上表は、露地栽培(2～3月播種、6～10月穫り)／トンネル早熟も)およびハウス抑制(4～6月播種、7～11月穫り)を基準としている。ハウス半促成(10～11月播種、2～6月穫り)、ハウス加温・促成(暖地、8月播種、11～6月穫り)では上記[カッコ内]のように施肥量を増加・調節し、その他の多用な作型の場合もこれらに準じる。

トウガラシ類(ナス科トウガラシ属)のうち、中果品種である「ピーマン」以外の「カラーピーマン」(大果)、「シシトウ」(小果)、「トウガラシ」(小果・辛味)は各施肥例を、また最近の多彩なピーマン類品種はどれか近い施肥例を参照する事。